学位被授与者氏名	邵小阳
論文題目	中国系ニューカマー児童の学校適応プロセスと支援のあり方 －X 市 A 小学校での参与観察から
論文審査結果の要旨	本論文において、高く評価できるのは以下の点である。 　第１に、小学校で週２～３日、約１年間にわたって参与観察を行っている点である。アクセスが難しく制約も多い学校というフィールドで継続的に調査を行うことには多くの困難がある。そうした壁を留学生スクールヘルパー（ボランティア）という立場を生かしながら乗り越え、第１次データに基づき、留学生スクールヘルパーの可能性、支援者間の連携の重要性、支援者と保護者との情報共有の必要性を指摘した点は評価できるだろう。 　第２に、先行研究を咀嚼しながら包括的な分析を行っている点である。学校における外国籍児童の適応－不適応の要因分析といった問題設定においては、分析の焦点は「教育制度」や「学校内」での諸アクターの問題に限定されがちである。もちろんそれは必要かつ重要だ。しかし、外国籍児童の学校での適応－不適応の問題は「学校外」の諸要因とも関連している。本論文では、潘英峰による先行研究に依拠しつつ、「学校内」と「学校外」の複数の場（ドメイン）でのさまざまな要因（個人的要因、家庭的要因、社会文化的要因、組織的要因）に目を向けて包括的な分析が行われている。そうした中から、学校での支援は授業に関するものが中心となっており支援の「隙間」が存在していること、地域日本語教室との連携や保護者の生活問題への支援が必要なことが示唆されている。 　第３に、論旨の一貫性である。（必ずしも十分ではない部分はあるものの）先行研究を踏まえた包括的な分析枠組とデータの解釈が、支援のあり方についての提案（支援者間の連携による包括的な支援の仕組みづくり、支援者と保護者間でのコミュニケーションの仕組みづくり、当事者による多文化ソーシャルワークなど）とダイレクトにつながっている。 　他方で、いくつか課題も見られた。 　第１に、「適応－不適応」といったキーとなる概念の定義が明確になされていないことである。論文からは、「適応」が、①授業に参加でき内容が理解できているかどうか、②学内で孤立しておらず友人や教師などと社会関係が取り結ばれているかどうか、といった２つの面で考えられていることは理解できる。しかし、「適応」と「同化」の違いも含め、中心となる概念については明確に定義する必要がある。 　第２に、先行研究のレビューが必ずしも十分ではないこと、特に「支援のあり方」について先行研究や先駆的な実践についてのレビューが弱い点である。本論文で知見としてあげられている適応－不適応の要因については、内外の先行研究ですでに指摘されていることも多い。６章で挙げられている「支援のあり方」についても、先進的な取り組みをしている自治体での実践事例を踏まえれば、さらに具体性と説得力を増したのではないかと思われる。 　第３に、保護者や支援者（支援に関わる教員、地域日本語教室のスタッフ、国際交流協会職員など）に対して、より詳細な調査が必要だと思われる点である。それがあれば、要因分析もさらに分厚いものとなったのではないか（特に家庭的要因の分析についてはそう感じられた）。保護者や支

	援者への聞き取り調査も計画されていたようであるが、新型コロナ感染拡大の影響で聞き取り調査ができなかったこと（保護者に対しては電話でのインタビューとなったこと）は残念であった。 　第 4 に、誤字脱字、フォントや用語の不統一な、表記上のミスが散見される点である。提出に当たっては、丁寧な見直し作業が必要である。 　ただし、これらの課題も修士論文の評価を大きく下げるものではないように思われる。本論文は修士論文として十分な内容をもつものと評価できる。 　2020 年 8 月 25 日（火）18:00 より、審査委員全員出席のもとで Zoom による最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士（人間関係学）として十分な内容であると判定した。